

キーツの眠り—「睡眠と詩」を中心に

山 本 由 美 子

An Exploration into Keats's "Sleep" As Manifested in "Sleep and Poetry"

YAMAMOTO Yumiko

Abstract

John Keats's "Sleep and Poetry", the closing poem in his very first collection, *Poems*, is a significant work in that it reveals Keats's poetic world and ambitions. It is in this first step toward becoming a great poet that Keats strives to immerse himself in "the agonies, the strife of human hearts", as he passes through the realm of Flora and old Pan and abandons the joy of sleep.

Placed adjacent to "poetry" in the title, "sleep" is a major element of imagery, the understanding of which is critical to the appreciation of "Sleep and Poetry". To use the words of E. de Sélincourt, Keats develops in this work "the contrast between the experiences of the unawakened and of the awakened mind". Studies have traditionally centered on the simple contrast between the two, with an emphasis on "poetry" rather than "sleep". This paper, however, will focus on "sleep", treating it as a manifestation of Keats's inner world that is integral to his notion of "poetry".

To Keats, "sleep" was much more than a mere physical rest. It signified his intoxication, his inclination for death, and finally his self-destroying "Negative Capability" which holds the key to Keats's poetic imagination. In fact, it might even be argued that elements closely connected to "sleep" are the seeds to understanding Keats's later great poems.

John Keatsの "Sleep and Poetry" は、構成面での欠点を指摘したJ. Little¹⁾ など、さまざまな批判はあるが、処女詩集*Poems* (1817) の巻末に収められた400行余りの初めての長編詩であり、詩人を目指す覚悟と決意がうたわれているので、きわめて重要な作品と言える。実際、J.H.Reynoldsは当時の雑誌*Champion*の中の*Poems*の書評欄で、本詩を"the

平成18年6月21日 原稿受理

大阪産業大学 教養部非常勤講師

1) Judy Little, *Keats as a Narrative Poet* (Lincoln, Neb.: U of Nebraska P, 1975) 18.

most powerful and the most perfect”²⁾と賞賛し、S. M. Sperryは大作*Endymion: A Poetical Romance*以前の作品の中で“the most important work”³⁾と認めている。

ところで、本詩について、KeatsとWilliam Wordsworthの詩人としての発達段階の比較や、詩に関するKeatsの思想は多く論じられているが、“Sleep”に焦点をあてた分析は少ない。しかし、“Sleep and Poetry”というタイトルからも明らかなように、“poetry”と同様、“sleep”はKeatsにとって少なからぬ意味を持つに違いない。“sleep”は文字通りの睡眠のほかに、忘我、死、Keatsが目指した“Negative Capability”とも関係があるように思われるからである。このような点から、本稿では主に“Sleep and Poetry”の中の睡眠、あるいは眠りに着目することにより、Keatsの詩と人生を眺め、彼にとって“sleep”がいかなるものであるかを考察する。

“Sleep and Poetry”は、Keatsが1816年10月にジャーナリストで詩人のLeigh Huntの家に招かれた時に書齋で瞑想に耽って過ごした一夜がきっかけとなって生まれた作品であるとされている。⁴⁾この詩の最後の数十行にわたって触れられているように、この書齋には、神話の世界をモチーフにした絵画や過去の詩人の肖像が飾られていて、Keatsはここで想像力を刺激され、詩人としての決意を固めたと思われる。

本詩を概説すると次のようになる。まず、当時Geoffrey Chaucerの作と考えられていた*The Floure and the Leafe*をモットーに掲げてから、冒頭で“sleep”を賛美し、次に、“sleep”にまさるものとして“poetry”の喜びをうたい、詩作への献身を誓う。そして、Keatsが人生を大邸宅にたとえて“the infant or thoughtless Chamber”と“the second Chamber, ...the Chamber of Maiden-Thought”と呼ぶ⁵⁾、人生の初期と第二期に触れる。さらに、その次の段階である感覚美を超越した理想の世界を、御者を用いて描写した後で、突然その幻が消え現実を突きつけられるさまを表す。それから、Chaucerおよびエリザベス朝の豊かな詩的想像力への憧れを綴り、形式的なイギリスの古典主義の詩や、その詩法をもたらししたフランスの詩人、Nicholas Boileau-Despréauxを非難し、ロマン派時代到来の喜びを述べる。さらに、詩の本質や想像力について語り、詩作への不安を抱きつつ詩人として

2) G. M. Matthews, ed., *Keats: The Critical Heritage* (London: Routledge and Kegan Paul, 1971) 48.

3) Stuart M. Sperry, *Keats the Poet* (Princeton: Princeton UP, 1973) 83.

4) Charles and Mary Cowden Clarke, *Recollections of Writers* (London: Sampson Low, Marston, Searle and Rivington, 1878) 133-34.

5) John Keats “To J. H. Reynolds,” 3 May 1818, *Letters of John Keats*, ed. Robert Gittings (London: Oxford UP, 1970) 95. Keatsの手紙からの引用はすべてこの版により、以下、宛先人、日付と頁数を記す。

の堅い決意を示す。最後に、Huntの書斎での追憶を辿り、一睡もしないまま迎えた朝について触れる。

まず、このような内容を持つ“Sleep and Poetry”の中で、“sleep”が取り上げられている箇所注目する。冒頭で次のように、“sleep”の喜びをうたい賞賛する。

What is more gentle than a wind in summer?
What is more soothing than the pretty hummer
That stays one moment in an open flower
And buzzes cheerily from bower and to bower?
What is more tranquil than a musk-rose blowing
In a green island, far from all men's knowing?
More healthful than the leafiness of dales?
More secret than a nest of nightingales?
More serene than Cordelia's countenance?
More full of visions than a high romance?
What, but thee, Sleep? Soft closer of our eyes!⁶⁾

ここでは頓呼法を用いて、“Sleep”と大文字で記し、この後さらに七行にわたって形容を重ねて呼びかけを続けるが、まず、休息を意味する睡眠を、優しく心慰めるもの、健康的で、穏やかで、ヴィジョンに満ちたものとして表現している。J. Littleが“a series of tedious questions”と表す⁷⁾ほど、疑問文が連なり、B.Blackstoneが言う⁸⁾ように、謎解きの形式ではあるが、睡眠の喜びについてのKeatsの考えが明示されている。この後に続く連では、“Sleep”にまさるものとして“Poesy”を登場させる。E.de Sélincourtはこの箇所について、“These first two paragraphs serve as an explanation of the title *Sleep and Poetry*, and develop the contrast between the experiences of the unawakened and of the awakened mind.”⁹⁾と述べているが、目覚めぬ心と目覚めた心の経験の対照という捉え方は、実には的確であると言える。

6) “Sleep and Poetry,” 1-11. *The Poems of John Keats*, ed. Miriam Allott (London: Longman, 1970). なお、Keatsの作品からの引用はすべてこのテキストにより、以下本詩からの引用については行数を本文中に記す。

7) Little 19.

8) Bernard Blackstone, *The Consecrated Urn* (London: Longmans, 1959) 104-105.

9) E. de Sélincourt, ed., *The Poems of John Keats*, 5th ed. (London: Methuen, 1926) 405.

そして、*“...the shade / Keeping a silence round a sleeping maid,”* (67-68) 中の *“sleeping”* は、静けさを表すために用いられ、また、*“Life is but a day; / A fragile dew-drop .../...a poor Indian’s sleep”* (85-87) 中の *“sleep”* は、人生のはかなさのたとえとして使われて、この二箇所での *“sleep”* の使用は効果的である。それから、*“First the realm I’ll pass / Of Flora and old Pan: sleep in the grass, / Feed upon apples red and strawberries, / And choose each pleasure that my fancy sees;”* (101-104) という詩行では、花神フローラと牧羊神パンの世界で休むKeatsの姿が描かれ、*“sleep”* の至福が表現されている。ここでは、単なる睡眠だけでなく、意識が目覚める前の段階も *“sleep”* に含まれるとKeatsは暗示していると思われる。先にも触れた、人生の「第二室」である「処女詩想の部屋」にいる時、つまり、感覚美の世界に浸って快い驚異しか目に映らない状態も *“sleep”* と考えているのである。

その後しばらく詩への思いを表し、後半で、*“Yet I must not forget / Sleep, quiet with his poppy coronet, / For what there may be worthy in these rhymes / I partly owe to him.”* (347-50) と述べ、初めて *“sleep”* と *“poetry”* の関係に触れる。詩の一部は *“sleep”* の力によるものであるとし、*“sleep”* の重要性を認めている。この場合の *“sleep”* を、睡眠と捉えるか、あるいは広義に解釈すべきかについては、後で詳述する。

最後に、Keatsは、L.Huntの書斎の寝いすで横になっているうちにさまざまなヴィジョンを得て、詩作への決意に繋がったことを明かす。そして、眠れぬ夜を過ごしながらも爽やかな朝を迎えるところで、詩行を締めくくる。

このように見ると、詩中の *“sleep”* は幸せなイメージであり、否定的な要素は感じられないが、それは、*“sleep”* が概ね、喜びをもたらす休息あるいは睡眠を意味するからであろう。しかし、Keatsが真に求めたものは、*“...the great end / Of Poesy, that it should be a friend / To soothe the cares and lift the thoughts of man.”* (245-47) と示されているように、「人の悩みを慰め、人の思想を高める」詩であり、次に引用する詩行に見られるような試練である。

And can I ever bid these joys farewell?
 Yes, I must pass them for a nobler life,
 Where I may find the agonies, the strife
 Of human hearts... (122-25)

このように、詩の目的を達成するために、安楽な世界を捨て、人間の心の苦悶や闘争がひ

そむ、もっと高尚な生活を求めなければならないと考えるKeatsにとって、喜びに満ちた、苦と無縁の“sleep”は詩作と無関係で遠ざけられるべきものであった。ひとつには、まだ偉大な詩を書いていないという焦燥感があったのだろう。そして、その逸る気持ちが、本詩の多くの批判を招いたとも言える。たとえば、度々取り上げられることであるが、人生の「第二室」の、フローラとパンの幸福な世界は精妙に表現されているのに、その直後から始まる“charioteer”（127）の描写は唐突で具体性に欠け、イメージが捉えにくいという非難である。ここでは、御者が駿馬を御する図を描いているが、Keatsは、馬車に乗って飛翔するApolloに似せて、詩人を御者にたとえたようである。しかし実際に、この箇所は、この想像力の描写の試みを“a disappointment”と酷評したM. Dickstein¹⁰⁾など、数多くの批評家を戸惑わせ、ほとんど理解されなかった。目覚めなければならない世界は、人生の「第二室」の次の段階、即ち自身がまだ踏み入れていない未知の領域である。それでも、Keatsは、その理想の境地に到達したいという強い思いに駆り立てられて描写を試み、その結果、漠然としたイメージしか持たない詩行に仕上がったと考えられる。

また、Keatsは古典主義の詩やBoileau、さらに、George Gordon Byronを指すとされる力を誇示する詩人を批判しているが、この点でも批評家の攻撃を受けることになる。これは、自らが目指す詩の理想を主張するために、このような大胆な手段を取ったものと思われる。

このように、目覚めぬ心の経験を排除し、目覚めた心の経験を求めるというKeatsの姿勢は、“sleep”と“poetry”を別の次元で捉えていたと言える。では、“sleep”が、喜びに満ちた休息、あるいは睡眠の意味だけでなく、“poetry”と関連性を持つのは、いかなる時で、一体いつからであろうか。そこで次に、苦悩を“交えた“sleep”を辿ることにする。

本作執筆時には、Keatsは詩の靈感の訪れにより、詩人としての決意を固めるまでになったことを喜びとし、そうして過ごした眠れぬ一夜を苦痛とは思っていないようである。しかし、外科医としての道を断念し、詩人としての険しい道を歩み始めてからは、苦からの解放を“sleep”に求めるようになる。たとえば、“To Sleep”の中で、“Save me from curious conscience...”¹¹⁾と言うように、“sleep”を奇妙な意識からの救済者と見做している。実際、KeatsはJ. H. Reynolds宛の手紙の中で、次のように当時の心境を語っている。

10) Morris Dickstein, *Keats and His Poetry: A Study in Development* (Chicago: U of Chicago P, 1971) 48.

11) “To Sleep,” 11.

I find that I cannot exist without poetry—without eternal poetry—half the day will not do—the whole of it...I had become all in Tremble from not having written any thing of late—the Sonnet over leaf did me some good. I slept the better last night for it—this Morning, however, I am nearly as bad again....¹²⁾

このように、詩のない人生は耐え難く、詩作していないと眠れないほど不安定であると告げている。また、L. Huntには“I...thought so much about Poetry, so long together, that I could not get to sleep at night....”¹³⁾と、詩について考えすぎて不眠に陥っていることをもらしている。詩が彼の生活と心をそれほど大きく占めるようになるのである。詩、あるいは詩作への過剰な意識のため、覚醒した状態が続き、睡眠が奪われ、目覚めている時との境界線が曖昧になる。こうして頻繁に訪れる異常な状態が、1819年の春に執筆された“Ode to a Nightingale”に顕著に見られ、その最終行の“Do I wake or sleep?”¹⁴⁾という問いかけは真に迫るものがある。田村英之助は、“Ode to a Nightingale”のはじめの三連は快楽を貪ろうとする眠りの世界を、第四連でナイチンゲールに合体しようとする詩の世界を描いて、“Sleep and Poetry”の静謐な眠りの世界と、それにまさる詩の世界との対比という筋立に酷似していることと、“Ode to a Nightingale”の眠りの世界は麻薬や酒による深刻なものであるという点を指摘している。¹⁵⁾確かに、“Sleep and Poetry”の健康的な陶酔による眠れぬ夜とは異なるが、“Ode to a Nightingale”の中の危険な眠りは、詩人にとってはマイナスの状態とは限らず、むしろ想像力の源や詩的陶酔を意味する。緊張と意識の解放の連続によってもたらされる極限の状態が、偉大なオードに数えられる“Ode to a Nightingale”のような傑作を生み出したとも言えるのである。

また、安らかな睡眠が奪われる状態が進み、苦痛が支配的になると、一時の逃避も許されないKeatsの意識は、永遠の眠り、すなわち、死に向かうことにもなる。たとえば、“Ode to a Nightingale”と同様に1819年の春に執筆された“Why did I laugh to-night?”の最終行の、“But Death’s intenser—Death is Life’s high meed.”¹⁶⁾に、死を美化する姿勢が見られる。この傾向は、早くも“Sleep and Poetry”の“...I may die a death / Of

12) To J. H. Reynolds, 17, 18 April 1817, 7-8.

13) To Leigh Hunt, 10 May 1817, 9.

14) “Ode to a Nightingale,” 80.

15) 田村英之助, 「*Sleep and Poetry*と*Endymion*」, 『茨城大学文理学部紀要』, 茨城大学, 第9号 (1959), p.38。

16) “Why did I laugh to-night?” 14.

luxury...”（58-59）という表現の中に辿ることができる。

Keatsのこのような死への憧憬は、彼の前に立ちはだかる現実が、それほど厳しいものであったからだと言える。実際、儉しい生活を支えるための詩作、なかなか想いの届かないFanny Brawneとの複雑な恋愛事情、末弟Tomの病と死、死を免れ得ない自らの重い病状などの耐え難い苦悩をKeatsは抱えていた。次に引用するFannyへの手紙は、当時のKeatsの苦境を表しており、悲痛な叫びが聞こえてくるようである。

I have two luxuries to brood over in my walks, your Loveliness and the hour of my death. O that I could have possession of them in the same minute. I hate the world: it batters me too much the wings of my self-will, and would I could take a sweet poison from your lips to send me out of it.¹⁷⁾

このように、Keatsはふたつの喜びを、Fannyの美と自分の死の時とし、自由な想像力の飛翔を阻む現実の世界を憎み、毒を欲している。残されたわずかな時間の中で望みを達成できずに煩悶し、その結果、死を求めるといった心理が見える。しかし、このような死への憧れが否定的な喜びであるとKeatsは認識していた。それゆえに、“...I feel my Body too weak to support me to the height; I am obliged continually to check myself and strive to be nothing.”¹⁸⁾と述べるように、自らの病を受け入れた上で無を志し、生を全うしようとする。

そこで、過酷な現実を前にして到達するのが、“Negative Capability”である。この消極的能力とは、“...*Negative Capability*, that is when man is capable of being in uncertainties, Mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact & reason....”¹⁹⁾と説明されているように、事実や理由を求めず、不確実、神秘、疑惑の中にあることのできる半知の能力のことである。これは無の境地、あるいは没我の精神であり、その意味で“sleep”と関連がある。

“Sleep and Poetry”では、“sleep”と“poetry”を題名で並列させ、喜びに満ち、高尚である点で両者を賛美している。と同時に、前者を目覚めぬ心の経験として、後者を目覚めた心の経験として、つまり、両者を対照的なものとして捉え、あくまでも“poetry”を

17) To Fanny Brawne, 25 July 1819, 271.

18) To J. H. Reynolds, 24 August 1819, 282.

19) To George and Tom Keats, 21, 27 (?) December 1817, 43. この手紙の日付については12月21日か27日かが不明であり、注はRobert Gittings編の書簡集中の表記通りとする。

“sleep”にまさるものとして位置づけている。いずれにしても、“Sleep and Poetry”の全編を通して両者の関連性をKeatsが明確に認識しているとは思えない。しかし、その後のKeatsの詩作過程と人生を見れば、“sleep”は詩人に深く関わるようになる。そこで次に、今一度綿密に本詩を見ることにより、この広義の“sleep”と“poetry”が不可分であるというKeatsの漠然とした意識や、“sleep”に通じる境地である“Negative Capability”の兆候を辿ることにする。

前述した、詩が一部は“sleep”の力によるものであるという一節について考えてみたい。ここでの“sleep”は、休息という意味の睡眠なのか、あるいはもっと深い意味が込められているのだろうか。

...many, many more,
 Might I indulge at large in all my store
 Of luxuries. Yet I must not forget
 Sleep, quiet with his poppy coronet,
 For what there may be worthy in these rhymes
 I partly owe to him. (345-50)

ここでは、あらゆる喜びに浸りたいとしながらも、詩が恩恵を受けているので、“sleep”のことを忘れてはならないと言っている。“poppy”は眠りの薬が取れるので、けしの王冠を頂いた“sleep”とは睡眠を指すと考えるのが妥当であり、「これらの詩の価値ある詩句は、一部睡眠のおかげである」と解釈すれば、Keatsが睡眠を力の蓄えや想像力の源として考えていたという捉え方ができる。しかし、少なくともこの“Sleep and Poetry”という作品は、KeatsがL.Huntの書斎で滞在した眠れぬ一夜に着想を得て創作されたので、睡眠のおかげであるとするのは釈然としない。続く詩行を見てみよう。

And thus the chimes
 Of friendly voices had just given place
 To as sweet a silence, when I 'gan retrace
 The pleasant day, upon a couch at ease.
 It was a poet's house who keeps the keys
 Of pleasure's temple. (350-55)

ここでは、確かに、「ある詩人の家」の「寝いすの上にくつろいで横になって」と書かれている。しかし、次に引用する最終連の詩行からKeatsが一睡もせず朝を迎えたことは明らかである。

The very sense of where I was might well
Keep sleep aloof, but more than that there came
Thought after thought to nourish up the flame
Within my breast, so that the morning light
Surprised me even from a sleepless night, (396-400)

このようにKeatsは、“Keep sleep aloof”と“a sleepless night”という表現を用いて、自分の居場所に対する不安感からというよりむしろ、次々に浮かぶ思いに駆られたために眠れなかったと不眠の原因を明かし、さらにその眠れぬ一夜の翌朝の心境を語っているからである。そうすれば、L.Huntの書斎で楽しい思いに耽れたのは、睡眠によるのではなく、ケシの力を借りたような、眠りに似た状態、つまり詩的陶酔によるのではなかろうか。あるいは、本詩に限らず、一旦詩情を眠らせ冷静に見つめ直して回想するという詩作時の一過程のことを言っているとも考えられる。ここでの“sleep”がいずれであるかは断定し難く、これらすべてを含んでいるように思われるが、少なくとも、Keatsが詩境を促す“sleep”の特質を認め、“sleep”と“poetry”との関係を意識していることは明白である。この箇所は、その後の人生を予兆するような異様な熱を帯びた眠れぬ夜への自戒の意味も込めて、“sleep”の重要性を自身に言い聞かせているようである。

では次に、没我という意味で“sleep”と関連のある“Negative Capability”の兆しは、“Sleep and Poetry”のどの詩行に見られるだろうか。

まず、古典主義の詩人たちを非難する箇所の、“...ye taught a school/ Of dolts to smooth, inlay, and clip, and fit, / Till .../ Their verses tallied. Easy was the task—/ A thousand handicraftsmen wore the mask / Of Poesy.”（196-201）という詩行では、Keatsの目指す詩が、体裁を整えただけの型通りの容易なものではなく、自由で、本質を問う厳しいものであることがわかる。併せて次の詩行に注目したい。

But strength alone, though of the Muses born,
Is like a fallen angel. Trees upturn,
Darkness and worms and shrouds and sepulchres

Delight it, for it feeds upon the burrs
And thorns of life, forgetting the great end
Of Poesy, that it should be a friend
To soothe the cares and lift the thoughts of man. (241-47)

力の誇示を避け謙虚さを尊ぶKeatsのこの信念は、一方に偏らず、あらゆる矛盾を受け入れる“Negative Capability”に発展するものと受け取れる。次の詩行でも“Negative Capability”に繋がる要素が見られる。

...let there nothing be
More boisterous than a lover's bended knee;
Naught more ungentle than the placid look
Of one who leans upon a closed book;
Naught more untr tranquil than the grassy slopes
Between two hills. All hail delight hopes!
As she was wont, the imagination
Into most lovely labyrinths will be gone,
And they shall be accounted poet-kings
Who simply tell the most heart-easing things.
Oh, may these joys be ripe before I die. (259-69)

このように、穏やかで静かなものを求め、人の心を最も和らげる事柄をうたうことによって、想像力を刺激する詩を作るという希望や、また、その喜びが成熟に至るまでの忍耐力も、“Negative Capability”に結びつくように思われるのである。そして、心静かに現実の諸相をじっと見据えて受け入れることによって初めて、詩人Keatsは自我を持たない全く別の存在として再生し、自由になれるのであり、読み手もまた自由な想像力の世界を享受できるのである。さらに、次の詩行に目を移そう。

What though I am not wealthy in the dower
Of spanning wisdom; though I do not know
The shiftings of the mighty winds that blow
Hither and thither all the changing thoughts

Of man; though no great ministering reason sorts
Out the dark mysteries of human souls
To clear conceiving... (284-90)

知識や理性をもとに明確な概念を組み立てることに固執しないこの姿勢も、まさに半知の状態に身を置く能力、“Negative Capability”の精神に通じると言える。

このように、“Sleep and Poetry”の中で“Negative Capability”の兆候を辿ってきたが、力や概念にではなく想像力によって、人の心を和らげる事柄を詩にうたうためには、半知の状態、あらゆる現実を受容しなければならず、没我の精神が下地になることは言うまでもない。そして、この自我の滅却、あるいは無の境地である“Negative Capability”こそが、最終的にKeatsが目指す“sleep”であると言える。それは、目覚める前の、自我の無い状態ではなく、目覚めという意識の上で成り立つものであるため、先にも引用した“strive to be nothing”という無になる努力が必要な、厳しい眠りである。そして、“Sleep and Poetry”執筆時には、Keatsはまず、詩人の道への第一歩として、人間の苦闘や闘争がひそむ一層高尚な生活を求めるにとどまり、没我、あるいは“Negative Capability”の境地は意識していないと思われる。しかし、本詩の中に、その下地となる思想の断片が見られ、それらが後年“Negative Capability”への目覚めを導くと言える。

以上の理由で、“Sleep and Poetry”の“sleep”に、睡眠以上の意味がひそんでいるように思われる。確かに、冒頭で、穏やかで心の慰めであり、高貴で美しいものという睡眠と詩の共通の喜びをうたった後で、この目覚めぬ心と目覚めた心の経験の対照を際立たせ、眠れぬ一夜を追想する最終連にまで結びつける詩行を見れば、睡眠に象徴される至福の世界を犠牲にして詩作を志す作品として読める。しかし、本詩の中の“sleep”に、陶醉あるいは忘我、死への憧憬、さらに、“Negative Capability”という没我の精神の萌芽を読み取れば、“sleep”対“poetry”という単純な図式はあてはまらなくなる。“sleep”がさまざまな意味合いを帯びて詩中で頭をもたげるからである。

Keatsは、あくまでも、経験と苦悩を経た厳しい現実認識を基にして、想像力に満ちた理想の世界をうたうことを目指したのであり、まずは、その苦の領域に踏み込んで初めて真の目覚めの時を迎えたと言える。そして、“sleep”がKeatsのそれ以降の詩と密接な関係があるという意味で、“Sleep and Poetry”は、Keatsの詩人としての出発点を示す重要な詩であると言える。Keatsは、“Sleep and Poetry”執筆の直前に、外科医ではなく詩人としての決意を固めるが、これはまさに、体を癒す人から心を癒す人へ転向であった。自らの未熟と経験不足を自覚し、心を癒す人を目指すために、苦悩の道を歩む決心を“Sleep

and Poetry”の中に綴ったのである。そして、完成度が最も高いと賞賛される“To Autumn”の中で、冬を見据えて秋をうたったように、究極の眠りである死をも受け入れることができるようになった時、“sleep”はKeatsの詩と人生に深い色合いを添えることになる。

参考文献

- Allott, Miriam, ed., [1970], *The Poems of John Keats*, London: Longman.
- Bate, W. Jackson, [1963], *John Keats*, Cambridge, Mass.: Harvard UP.
- Blackstone, Bernard, [1959], *The Consecrated Urn*, London: Longmans.
- Clarke, Charles Cowden, and Mary Cowden Clarke, [1878], *Recollections of Writers*, London: Sampson Low, Marston, Searle and Rivington.
- Colvin, Sidney, [1917], *John Keats: His Life and Poetry, His Friends, Critics and After-Fame*, London: Macmillan.
- De Selincourt, E., ed., [1926], *The Poems of John Keats*, 5th ed., London: Methuen.
- Dickstein, Morris, [1971], *Keats and His Poetry: A Study in Development*, Chicago: U of Chicago P.
- Finney, Claude Lee, [1936], *The Evolution of Keats's Poetry*, 2 vols., Cambridge, Mass.: Harvard UP.
- Garrod, H.W., [1926], *Keats*, Oxford: Clarendon P.
- Gittings, Robert, ed., [1970], *Letters of John Keats*, London: Oxford UP.
- Jones, John, [1969], *John Keats's Dream of Truth*, London: Chatto and Windus.
- Little, Judy, [1975], *Keats as a Narrative Poet*, Lincoln, Neb.: U of Nebraska P.
- Lowell, Amy, [1925], *John Keats*, 2 vols., London: Jonathan Cape.
- Matthews, G. M. ed., [1971], *Keats: The Critical Heritage*, London: Routledge and Kegan Paul.
- Mayhead, Robin, [1967], *John Keats*, Cambridge: Cambridge UP.
- Muir, Kenneth, ed., [1958], *John Keats: A Reassessment*, Liverpool: Liverpool UP.
- Murry, John Middleton, [1925], *Keats and Shakespeare*, London: Oxford UP.
- , [1955], *Keats*, 4th ed., London: Jonathan Cape.
- Saito, Takeshi, [1929], *Keats' View of Poetry*, London: Cobden-Sanderson.
- Sperry, Stuart M., [1973], *Keats the Poet*, Princeton: Princeton UP.
- Stillinger, Jack, [1971], *The Hoodwinking of Madeline and Other Essays on Keats's Poems*,

Chicago: U of Illinois P.

—, [1974], *The Texts of Keats's Poems*, Cambridge, Mass.: Harvard UP.

加納秀夫, [1956], 「“Sleep and Poetry”について」, 『斎藤勇博士古稀祝賀論文集 英文学研究』, pp.487-502, 研究社。

斎藤勇, [1937], 『キーツ』(英米文学評伝叢書45), 研究社。

阪田勝三, [1976], 『ジョン・キーツ論考』, 南雲堂。

佐藤清, [1954], 「キーツの『睡眠と詩』について」, 『英文学思潮』, 青山学院大学, 第27号, pp.90-118.

高野正夫, [1986], 『感性の宴』, 篠崎書林。

高橋雄四郎, [1973], 『キーツ研究』, 北星堂。

田村英之助, [1959], 「*Sleep and Poetry* と *Endymion*」, 『茨城大学文理学部紀要』, 茨城大学, 第9号, pp.27-40。

—訳, [1977], 『キーツ 詩人の手紙』(富山房百科文庫, 5), 富山房。

出口保夫, [1974], 『キーツ・人と作品』, 白鳳社。

—訳, [1974], 『キーツ全詩集』3巻, 白鳳社。

松浦暢, [1979], 『キーツ』, 吾妻書房。

—訳, [1971], 『キーツの手紙』, 吾妻書房。